

「音楽のまち・ひめじ」でウィーンの息吹を。 N響メンバーによるニューイヤーコンサートを開催



篠崎史紀さん

姫路市文化国際交流財団設立30年特別企画として、去る7月にNHK交響楽団（N響）の姫路公演を、4月には出演メンバーによるプレコンサートを実施しました。さらに来年1月21日(月)には、リニューアル工事が完了したパルナソスホールで「N響第1コンサートマスター篠

崎史紀&N響メンバーによるNew Yearコンサート」を開催。NHK「クラシック音楽館」の案内人「MARO」としても知られる篠崎史紀さん率いる弦楽五重奏が出演します。

今回の演奏会のテーマは「ウィンナ・ワルツ」。19世紀のウィーンで流行し、毎年1月1日のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団ニューイヤーコンサートで演奏されることでも

知られています。「ニューイヤーと聞いて、それならウィンナ・ワルツだと。そもそもワルツはオーケストラよりもクインテット（五重奏）。ウィーンでは舞踏会シーズンが1月中旬から始まり、レストランでも開かれている。時期が同じということも決め手になった」と篠崎さんは話します。

この演奏会は「音楽のまち・ひめじ」事業の一環でもあります。「音楽は人種や宗教、言語を超えて人間を結びつけることができる素晴らしいアイテム。それを姫路のまちから発信できることは素晴らしいと思う。なかでもクラシックは何百年も前から根本的なところを変えず、何千人というアーティストが演奏し伝承し続けている、いわば現在・過去・未来が詰まった『共通語』。1月のコンサートではウィーンのスロン文化の発端となったものを、現地のスタイルで、姫路で再現したい」と話しています。

プログラムはウィンナ・ワルツの創始者とされるヨーゼフ・ランナー、「ワルツの父」と呼ばれるヨハン・シュトラウスI世とその息子の作品のほか、フリッツ・クライスラー「愛の喜び」など、新春にふさわしい華やかなプログラムが予定されています。

※詳細は巻末の「事業あんない」をご覧ください。

問パルナソスホール ☎079-297-1141

書写の里・美術工芸館で特別展示「姫路藩窯 東山焼」展

染付山水図鶯耳花入
個人蔵

書写の里・美術工芸館で「姫路藩窯 東山焼」展が開かれています。

東山焼は現在の姫路市東山で始まったやきもので、姫路藩の管理のもとにやかれた最高級の磁器です。文政5年(1822)に、将軍徳川家斉の娘喜代姫が姫路藩次期藩主の酒井忠学に嫁ぐことが決まり、将軍家をはじめとする関係先への贈答品が必要となった姫路藩では、時の家老河合道臣(寸翁)の命で京都から陶工を招き、その指導で製作が

始まったと伝えられています。

その後、実際に興入れが行われた天保3年(1832)をピークに、安政の頃(1854~60)まで姫路藩の威信をかけた「藩窯」としてやかれ、染付を中心に高い評価を得ています。

幸い多くの優品が現存しており、今回の展覧会では同館が収集してきた約50点の作品と借受品を合わせて約100点で展覧しています。

展示は、花瓶の耳を白鷺の頭の形にするなど、東山焼ならではの特徴的な造形を紹介する「東山焼の造形」、藩窯として文人趣味にあふれた作品が多かった東山焼を茶道具を中心に

見ていく「東山焼と茶道具」、青く発色する顔料で絵が描かれた染付や全体が青緑色に発色した青磁など多彩な色に注目した「東山焼の色」、製作年や作者名などが記された“銘”から東山焼の歴史や実態を読み解く「作品が語るもの」の4部構成になっています。

また、今回の特別展示は姫路城世界遺産登録25周年を記念するもので、同館が東山焼展を開催するのは14年ぶりのこと。担当学芸員の岡崎美穂さんも「姫路国産の贈答品として生まれた東山焼には京焼系の品格あふれる上級品が多いですし、図柄も中国伝来の祥瑞文のほか、木場の三つ橋を描いた手焙など地元ならではの作品も少なくありません。姫路・播磨を代表する工芸品である東山焼を、いろんな角度からご覧いただけたと思います」と話しています。

狛犬(阿形)
東山自治会蔵 姫路市立美術館寄託染付姫路木場図手焙
兵庫陶芸美術館蔵

※詳細は7ページをご覧ください。

問書写の里・美術工芸館 ☎079-267-0301